

平安京右京二条四坊十五町跡

2006年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京二条四坊十五町跡

2006年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は、今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できるとなります。

このたび公園整備事業に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

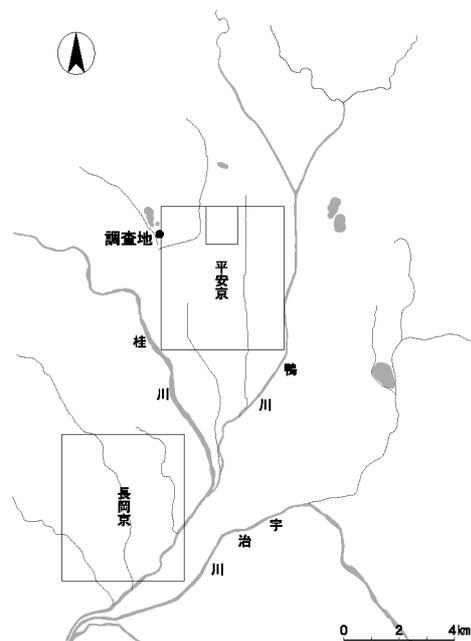
平成18年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京二条四坊十五町跡
- 2 調査所在地 京都市右京区太秦安井西裏町 地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 梶本頼兼
- 4 調査期間 2005年10月11日～2006年2月16日
- 5 調査面積 298m²
- 6 調査担当者 長戸満男
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「花園」「山ノ内」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位(m)を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺 構 番 号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺 物 番 号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 掲 載 写 真 村井伸也・幸明綾子
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 土 壌 分 析 竜子正彦
- 17 本 書 作 成 長戸満男
- 18 編 集 ・ 調 整 児玉光世
- 19 本書は、2001年度から発刊してきた『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報』を、今年度より書名変更したものである。



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	2
3. 遺 構	3
(1) 基本層位	3
(2) 遺 構	4
4. 遺 物	13
5. ま と め	18

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	1 - 1 区全景 (西から)
		2	1 - 2 区全景 (南東から)
図版 2	遺構	1	2 区全景 (西から)
		2	3 区全景 (北から)
図版 3	遺構	1	4 区全景 (北から)
		2	5 区全景 (南から)
図版 4	遺構	1	1 - 1 区溝 1 検出状況 (南西から)
		2	1 - 1 区溝 2 検出状況 (北から)
図版 5	出土遺物		

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 2,500)	1
図 2	調査区配置図 (1 : 2,000)	2
図 3	調査前全景	3
図 4	調査風景	3
図 5	1 - 1 区遺構実測図 (1 : 80)	5
図 6	1 - 2 区遺構実測図 (1 : 80)	6
図 7	2 区遺構実測図 (1 : 80)	8
図 8	3 区遺構実測図 (1 : 80)	9

図9	4区遺構実測図(1:80)	10
図10	5区遺構実測図(1:80)	12
図11	溝1出土土器実測図(1:4)	14
図12	溝81・82出土土器実測図(1:4)	15
図13	溝81下層出土土器拓影・実測図(1:2)	15
図14	溝131・路面137出土土器実測図(1:4)	16
図15	溝83出土土器実測図(1:4)	16
図16	溝132出土土器実測図(1:4)	16
図17	土壙80上層出土土器実測図(1:4)	16
図18	土壙80下層出土土器実測図(1:4)	17
図19	軒瓦拓影・実測図(1:3)	17
図20	土壙80上層出土銭貨拓影(1:2)	18
図21	土壙111出土木製品実測図(1:2)	18
図22	1・2区条坊関連遺構図(1:200)	19
図23	4区条坊関連遺構図(1:200)	20

表 目 次

表1	遺構概要表	4
表2	遺物概要表	13

付 表 目 次

付表1	溝1出土掲載土器一覧表	22
付表2	溝81・82出土掲載土器一覧表	22
付表3	溝81下層出土掲載土器一覧表	22
付表4	溝131・路面137出土掲載土器一覧表	22
付表5	溝83出土掲載土器一覧表	22
付表6	溝132出土掲載土器一覧表	22
付表7	土壙80上層出土掲載土器一覧表	22
付表8	土壙80下層出土掲載土器一覧表	22
付表9	掲載軒瓦一覧表	22

平安京右京二条四坊十五町跡

1. 調査経過

本調査は平安京跡内に位置する太秦安井公園整備事業に伴う発掘調査であり、京都市より委託を受け、京都市埋蔵文化財調査センターの指導の下、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。調査地点は右京区太秦安井西裏町に所在し、JR山陰線花園駅の南約150m、京都市右京ふれあい文化会館の東側に位置する。

本調査では調査期間が前後2回に分かれ、平成17年10月11日から11月8日までの期間は、調査地の南半部において西京極大路両側溝の検出を主な目的として調査した。調査区は調査地が工場の跡地であることから旧建造物の位置を避けて1～3区を設定し調査した。その後、平成18年1月30日から2月16日までの期間は、公園整備に伴う防火水槽および便所棟の建設予定地に調査区4・5区を設定して調査を実施した。調査面積は298㎡である(図1)。

調査では表土および積土を機械掘削で除去し、以下を遺構面として人力掘削に転換した。ただし本調査では大半の遺構を地山面で検出している。遺構や遺物が出土した際には慎重に掘削し、状況に応じて写真撮影や実測図面などの記録作成を行いながら調査を進めた。



図1 調査位置図(1:2,500)

2. 位置と環境

調査地点は、平安京跡の北西端に位置しており、平安京の条坊によると調査地の東部が右京二条四坊十五町に属し、中央部が西京極大路、北端部が西京極大路と春日小路の交差点、南端部が西京極大路と大炊御門大路の交差点に推定され、西部が京域外となる（図2）。

十五町は、『拾芥抄』西京図によると平安時代には右近衛府の所領とある。近衛府は令外の官として設置された朝廷の親衛軍組織であり、奈良時代後半から江戸時代末期まで存続したとされる。当初、衛府は令制下に衛門府、左右衛士府、左右兵衛府の五衛府をおいたが、平安時代初頭に左右衛門府、左右兵衛府、左右近衛府の六衛府になったとされ、特に近衛府は天皇の最も側近を警護する軍隊で、六衛府の中でも筆頭の衛府とされた。

西京極大路は、平安京の四周を囲う条坊路の一つで、最も西辺に位置する大路である。その規模は『延喜式』京程によると築地心々間の幅が十丈（約30m）とされる。

西京極大路の調査事例は次の3例が挙げられる。

1990年度のJR花園駅構内道路建設に伴う一条四坊十三町・西京極大路跡の調査¹⁾では、平安時代中期（11世紀中頃）の東側溝の一部を検出した。

1996年度のJR山陰本線連続立体交差化および花園駅周辺整備事業に伴う一条四坊十二・十三町および法金剛院境内の調査²⁾では、平安時代後期の整地面で東側溝、東築地に伴う柱穴などをほ

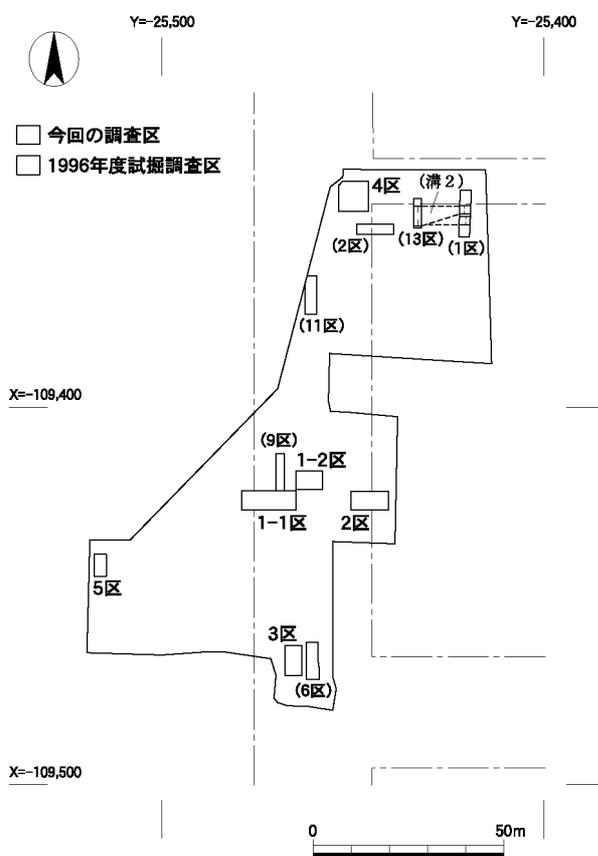


図2 調査区配置図（1：2,000）

ぼ推定位置に検出したが、西側溝、西築地については推定位置よりも12.5m程東側の地点で検出し、西接する法金剛院の寺域が平安時代後期（12世紀前半）には大路側に張り出して占地されていたことが判明する。西側溝では平安時代後期、室町時代、江戸時代の3時期を確認する。西築地の推定地付近では平安時代中期（10世紀）に埋没した南北溝2条が検出され、当初は『延喜式』京程記載の大路幅が確保されていた可能性が指摘された。路面については現表土下0.4～1.1mの間に平安時代後期から江戸時代まで5面を確認する。

1997年度の京都市右京文化会館建設に伴う二条四坊十五町および安井西裏瓦窯跡の調査³⁾では、平安時代中期（11世紀代）から室町時代後期（15世紀代）の路面、平安時代後期（12世紀前半）の西側溝を検出した。



図3 調査前全景



図4 調査風景

西側溝については同大路の西築地中心推定線より約10m東に位置し、道路幅が縮小されていたことが判明する。この道路幅の規模縮小については先述した一条四坊の調査（1996）に於ても同様の事例がみられたことから、北接する法金剛院の周辺整備に伴うものと考えられ、寺域外の南方にまで及んでいたことが判明する。

また調査地南半部は、鎌倉時代から室町時代にかけての禅宗寺院である龍翔寺跡の北西部に推定される。『太秦村誌』などの文献によると、鎌倉時代後期、延慶元年（1308）の円通大応国師（南浦紹明）没後、後宇多天皇が離宮を寺とし、南浦紹明を開山として瑞鳳山龍翔寺を建立したとされる。その後、龍翔寺は室町時代初期の至徳3年（1386）には五山官寺機構に於て京都十刹中の第十位に列せられるが、永享3年（1431）に第九位の大徳寺が十刹の寺格を辞退した時、龍翔寺も十刹中からはずされた可能性がある。この時期、龍翔寺の寺域は广大で約3町歩に及んだとされるが、応仁の乱以後には荒廃し、大徳寺内に移転している。故地には大応国師の塔を建立し、明治18年（1885）まで毎年大徳寺中龍翔寺の僧が廟参読経を継続したとされる。現在、旧境内の推定地には後宇多天皇御髪塔が残されている。

3. 遺 構

（1）基本層位

調査地は東洋現像所（イマジカ）の跡地であり、工場用地として自然地形に盛土を施し、全体をほぼ平坦に造成したと考えられる。現況は更地の状態であり、全体に芝生が植え込まれている。現地表の標高は、南北に約120m離れた調査区3・4区を比較してみると、北端部の4区が39.7m、南端部の3区が39.3～39.5mを測り、比高0.2～0.4mとごくわずかである。盛土の層厚は、場所によって異なるが概ね0.3～2.0mを測り、旧建物基礎などにより攪拌されている場所が大半を占めている。下層には近代・近世以前の堆積層・遺構が認められるが、調査区が調査対象地全体に分散し、各地点によって堆積状況がそれぞれ異なるため、盛土以下の基本層序については各調査区の項でその概要を述べる。

(2) 遺 構

本調査では平安時代から江戸時代までの遺構128基を検出した。平安時代の遺構は西京極大路の東西両側溝と推定される南北方向の溝を検出した。鎌倉・室町時代の遺構は春日小路路面および南側溝と推定される遺構の他、溝、柱穴、土壇、ピット、落込などを検出した。江戸時代の遺構は溝、土壇、ピットなどを検出した。以下、1～5区で検出した遺構について各調査区ごとに報告する。

1-1区(図5・22、図版1・4)

西京極大路の路面および西側溝の検出を目的として、調査対象地の南半部に設定した調査区である。調査区規模は、東西14.0m、南北5.0m、面積70.0㎡である。現地表は標高39.1～39.2mを測る。堆積状況は、大半が建物基礎や人孔を含む埋設管、あるいは敷地造成に伴い攪乱されているが、調査区中央部から北東部にかけて遺構が残存していた。断面観察によると近世以前の堆積層は標高38.5m以下に部分的ながら確認される。遺構面(地山面)は現地表下1.0～1.1m(標高38.0～38.1m)に位置した。

遺構は、溝3条(溝1・2・67)の他、礎石を伴う柱穴や多数のピットを検出した。

溝1は、調査区東端部に位置する南北方向の溝で、検出長2.3m、幅1.6m、深さ0.5m、底面標高37.6mを測る。堆積土は4層(5～8)が確認できるが、上層(5・6)と下層(7・8)に大別される。下層の溝幅は裾部の復元から約1.2mと推定できる。遺物は上層では鎌倉時代、下層では平安時代後期の土師器皿などが比較的多く出土した。溝1は遺構の時期や規模、検出位置などから西京極大路の西側溝と推定される。

溝2は、調査区西端部に位置する南北方向の溝で、検出長1.9m、幅0.9m、深さ0.2m、底面標高37.8mを測る。堆積土は褐色泥砂(10YR4/4)である。遺物は平安時代末期から鎌倉時代前期にかけた土師器皿、瓦、輸入陶磁器青磁などが少量出土した。

1-1区の埋め戻し時には、調査区中央南壁際に検出した南北方向の溝67の延長を確認する目的から、中央部南側を東西5.0m、南北3.0m、面積15.0㎡の規模で拡張した。その結果、溝67は直線的に約2.0m延伸し、東西方向の溝とT字状に連結することを確認した。遺構規模は幅0.6～0.7m、深さ0.3～0.4mを測る。堆積土は灰黄褐色シルト(10YR5/2～4/2)である。遺物は鎌倉時代の土師器皿が少量出土した(図22)。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代後期	西京極大路東西側溝	
鎌倉・室町時代	西京極大路東西側溝、春日小路路面および南側溝、溝、土壇、柱穴、ピット	
江戸時代	溝、土壇、柱穴、ピット	

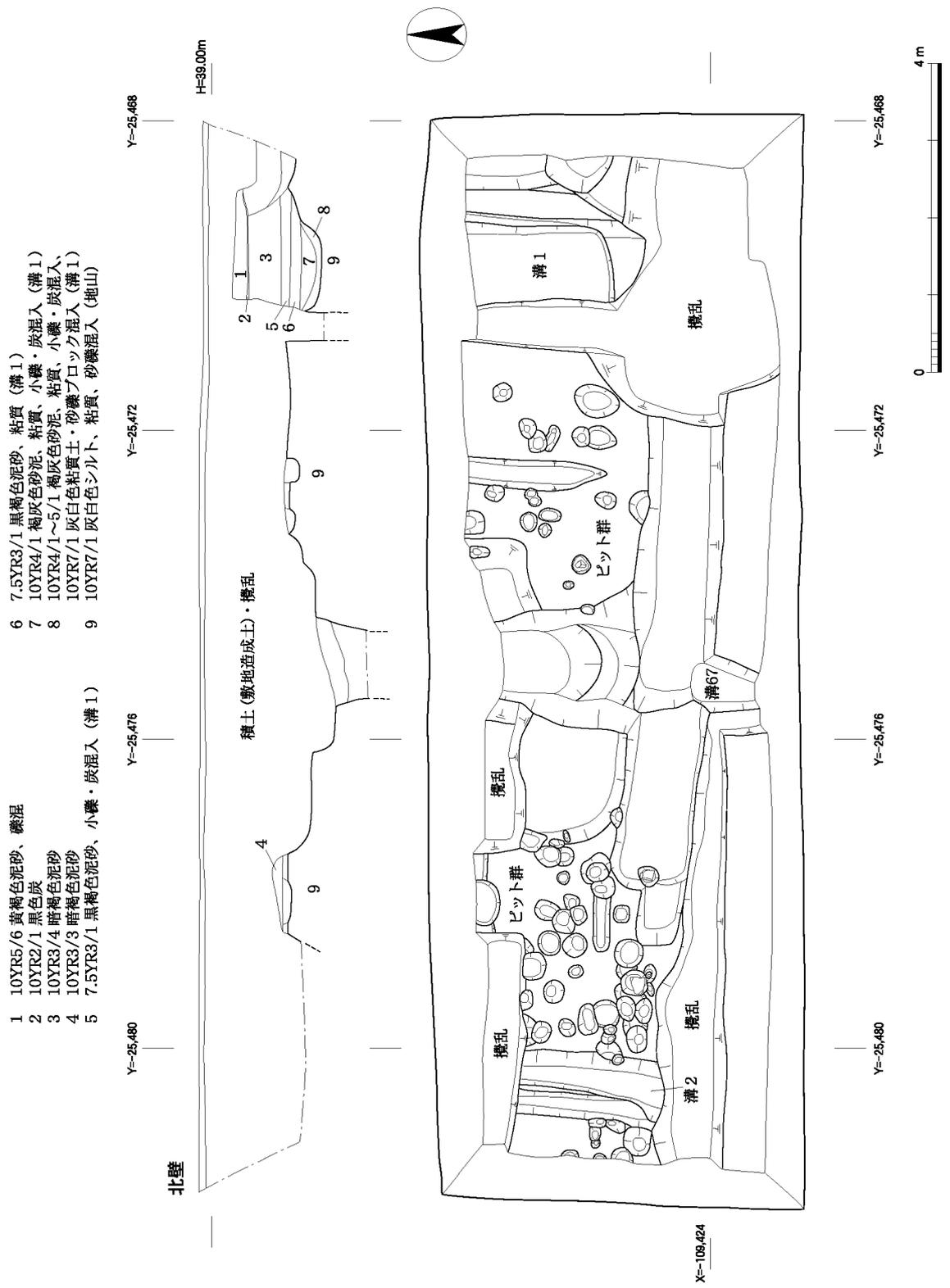
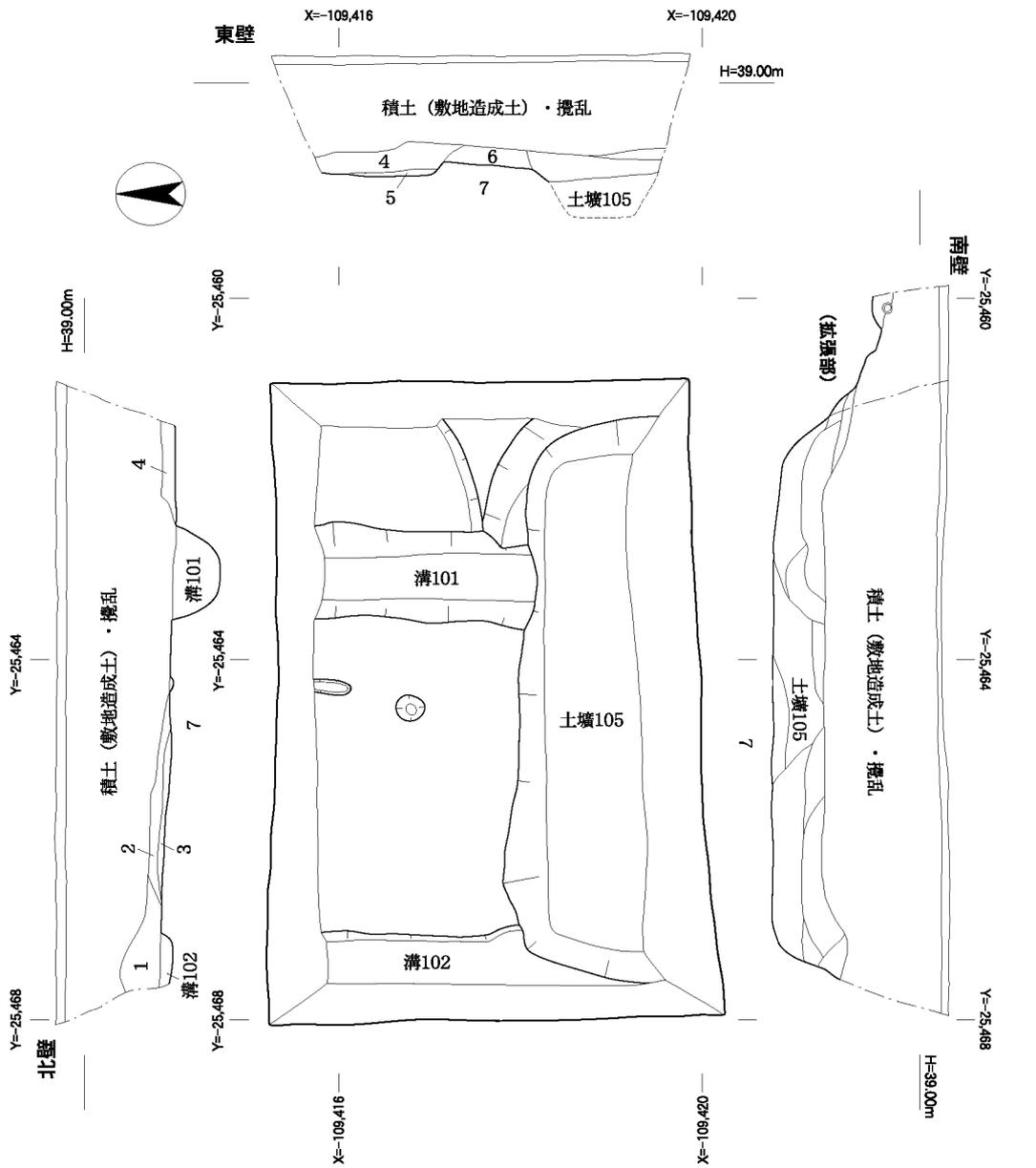


図5 1-1区遺構実測図(1:80)



- 1 10YR3/3~3/4 暗褐色泥砂
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、粘質、砂礫ブロック混入
- 3 10YR6/4~6/6 にぶい黄橙色~明黄褐色粘質土、
上層ブロック混入多量
- 4 10YR3/1~3/2 黒褐色泥砂
- 5 10YR3/1~3/2 黒褐色泥砂、下層ブロック混入多量
- 6 10YR6/4~6/6 にぶい黄橙色~明黄褐色粘質土 (地山)
- 7 10YR6/4~6/6 にぶい黄橙色~明黄褐色粘質土、礫混 (地山)

図6 1-2区遺構実測図(1:80)

1 - 2 区 (図 6 ・ 22、 図 版 1)

1 - 1 区の東延長部が攪乱を受けていたため、その北側に設定した。1 - 1 区と同様、西京極大路の路面および西側溝の検出を目的とした調査区である。調査区規模は、東西7.0m、南北5.0m、面積35.0㎡である。現地表は標高39.3mを測る。堆積状況は、敷地造成に伴う盛土・攪乱が地山面にまで達しているが、部分的に近世以前の堆積層が残存している。遺構面（地山面）は現地表下1.0～1.3m（標高38.3～38.0m）に位置した。

遺構は、溝2条（溝101・102）の他、やや大型の土壇105を検出した。

溝101は、調査区東部に位置する南北方向の溝で、検出長2.4m、幅1.0m、深さ0.5m、底面標高37.5mを測る。堆積土は灰色粘質シルト（5Y4/1）である。遺物は江戸時代の施釉陶器などが出土した。

溝102は、調査区西端に位置する南北方向の溝で、西肩部は調査区外になる。検出長4.5m、幅0.5～0.6m、深さ0.1～0.2m、底面標高38.0mを測る。堆積土は暗褐色泥砂（10YR3/4）である。遺物は中世の土師器皿が少量出土した。

土壇105は、調査区南端に位置し、南肩部は調査区外になる。遺構規模は東西6.4m、南北1.7m以上、深さ0.8m、底面標高37.4mを測る。堆積土はオリーブ黒シルト（7.5Y3/1）と灰色粘質土（7.5Y4/1）が入り混じっており、礫が多く混入している。遺物は鎌倉時代の土師器、須恵器、焼締陶器の他、平安時代の緑釉陶器、軒平瓦などが混入して出土した。

1 - 2 区の埋め戻し時には、西京極大路の路面を確認する目的で、地山面が比較的浅く良好に残存する東側を、東西1.2m、南北5.0m、面積6.0㎡の規模で拡張した。結果、図6の南壁断面図に示したように、地山面は表土下0.7m（標高38.6m）の比較的浅い位置で部分的に検出できたが、西京極大路の路面については敷地造成などによって攪乱されており未確認であった（図22）。

2 区 (図 7 ・ 22、 図 版 2)

西京極大路の路面および東側溝の検出を目的として、調査対象地の南半部ほぼ中央の東端、1 - 1 区の東延長線上に設定した調査区である。調査区規模は、東西10.0m、南北5.0m、面積50.0㎡である。現地表は標高39.2～39.5mを測る。堆積状況は、一部に建物基礎や攪乱層が認められるが、遺構残存状況としては、調査対象地内では最も良好な場所と判断される。遺構面（地山面）は現地表下0.6～0.9m（標高38.5～38.6m）に位置した。

遺構は、溝1条（溝81）土壇71・80の他、溝状遺構、土壇、ピットなどを検出した。

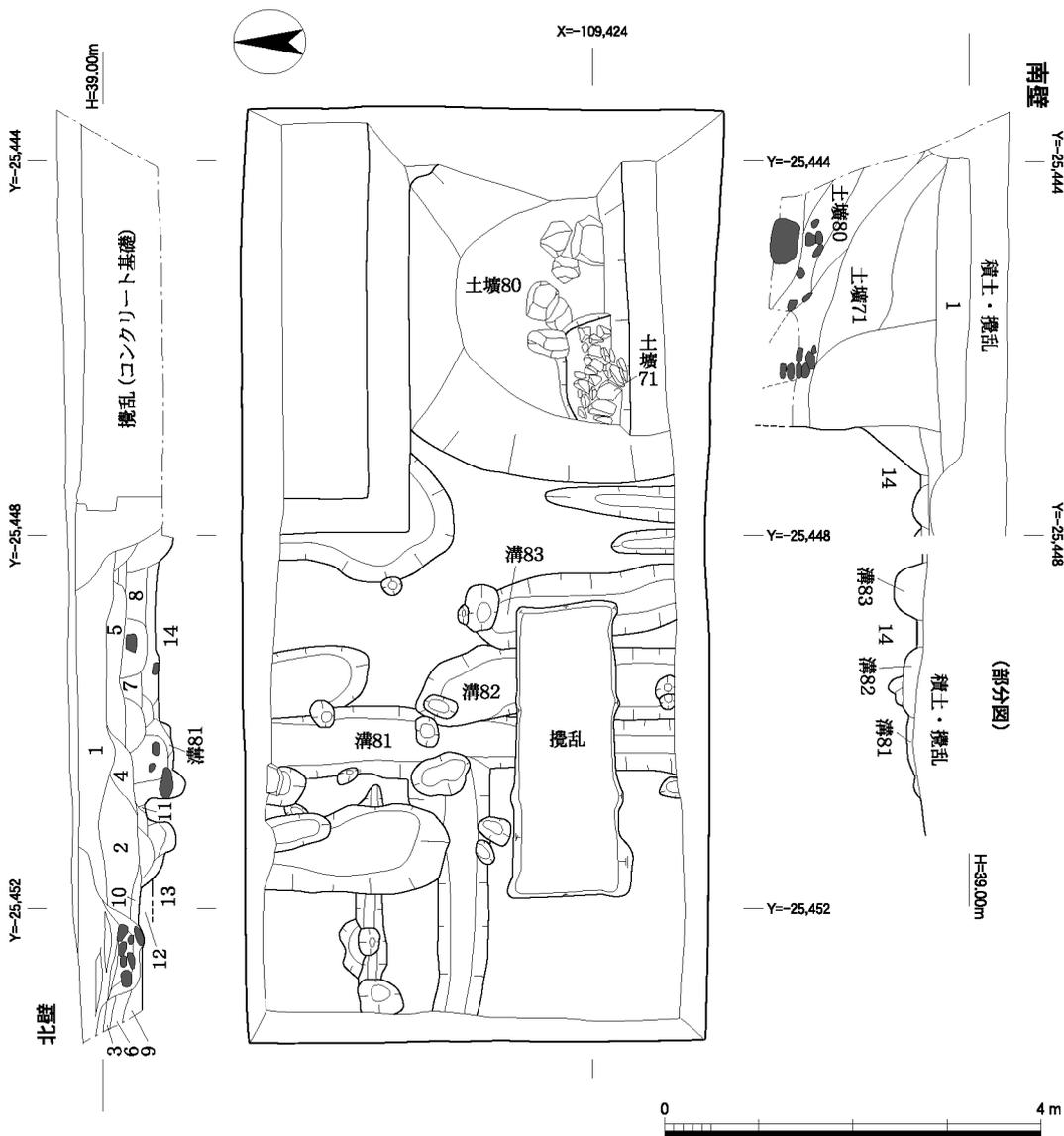
溝81は、調査区西半部に位置する南北方向の溝で、検出長4.3m、幅0.8m、深さ0.1～0.3m、底面標高38.3mを測る。堆積土は小礫などの混入が少ない均質な黒褐色シルト（10YR2/2）である。遺物は平安時代から鎌倉時代にかけての土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦などが出土した。溝81は遺構時期や検出位置などから西京極大路の東側溝と推定される。

土壇80は、調査区南東部に位置する。土壇西肩部の一部を検出したのみで、それ以外のはほとんど調査区外になるが、掘り込み形状から判断して平面楕円形を呈する遺構と考えられる。底面が深くて未検出であることから井戸の可能性もある。遺構規模は東西3.5m以上、南北2.8m以上、深

さ1.8m以上を測る。堆積土は暗褐色礫混シルト（10YR3/3）や黒褐色粘質シルト（10YR3/2）などである。掘り下げ時には径50cm以上の河原石が投棄された状態で多量に出土したことから石組井戸の可能性も否定できない。遺物は鎌倉時代の土師器、瓦器、焼締陶器、瓦塼などが出土した。

土壌71は、土壌80の掘形に重複する様な状態で検出した。底部付近には土壌80の西壁を利用した平面円弧状の石組が認められたが、構造的にみて用途が不明瞭であり、他に類似例をみない。遺物は桃山時代から江戸時代にかけての土師器、焼締陶器、施釉陶器、染付磁器などが出土した。

2区の埋め戻し時には、西京極大路東側溝と推定される溝81の南北延長と土壌80の遺構規模を



- | | |
|------------------------------|---------------------------------|
| 1 10YR3/3~3/4 暗褐色泥砂、砂礫質 | 8 10YR3/3 暗褐色シルト、6と同質 |
| 2 10YR3/3~3/4 暗褐色シルト、礫混入 | 9 10YR3/3 暗褐色シルト、6と同質、下層ブロック混入 |
| 3 10YR3/4 暗褐色シルト、小礫・土器碎片混入 | 10 10YR3/3 暗褐色シルト、9と同質 |
| 4 10YR3/3 暗褐色シルト、3に類似 | 11 10YR3/3 暗褐色シルト、9と同質 |
| 5 10YR3/3 暗褐色シルト、3に類似、やや砂質 | 12 10YR7/2~7/3 にぶい黄褐色シルト、粘質（地山） |
| 6 10YR3/3 暗褐色シルト、小礫・土器碎片少量混入 | 13 2.5Y7/2~6/2 灰黄色シルト、粘質（地山） |
| 7 10YR3/3 暗褐色シルト、6と同質 | 14 10YR6/6~6/8 明黄褐色シルト、粘質（地山） |

図7 2区遺構実測図（1：80）

確認する目的で、溝81の南北を各2.0m×2.0m、面積8.0㎡、土塙80の南側を東西4.5m、南北2.5m、面積11.25㎡の規模で拡張した。その結果、溝81は南北共に延伸することを確認し、延長8.4mを検出したことになる。また溝81の北延長部は北端で幅1.1m、深さ0.2mと次第に拡幅し、溝の規模や形状が安定することを確認した。土塙80は南壁を検出し、南北4.2m以上の規模であることを確認した。また溝81の北側拡張部や土塙80の拡張部では、13～25cm大の礎石を伴う径0.4～0.5mの柱穴2基、一辺0.4～0.5mの方形状の柱穴1基の他、径0.2～0.3mのピットを多数検出した(図22)。

3区(図8、図版2)

西京極大路と大炊御門大路の交差部、および1997年度の調査成果に基づく西京極大路西側溝の検出を目的として、調査対象地の南東端部に設定した調査区である。調査区規模は、東西4.5m、南北8.0m、面積36.0㎡である。現地表は標高39.3～39.5mを測る。堆積状況は、敷地造成に伴う盛土・攪乱および埋設管などが認められるが、標高37.5m以下に近世以前の堆積層が薄く残存している。遺構面(地山面)は現地表下2.0～2.1m(標高37.2～37.3m)に位置した。

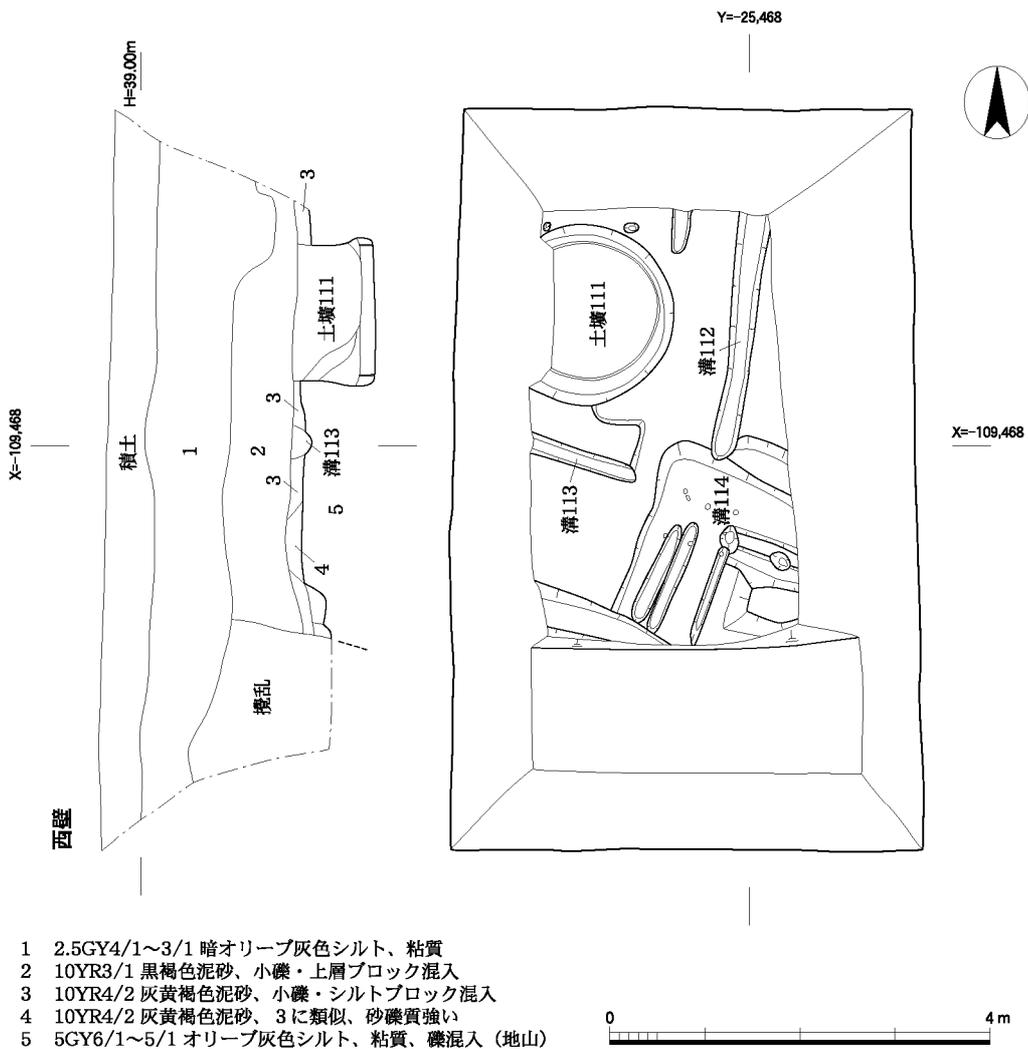


図8 3区遺構実測図(1:80)

いた。箍は竹製で内径145cmを測る。堆積土は埋土が暗褐色粘質シルト（10YR3/3） 箍内部がオリーブ灰色シルト質粗砂である。遺物は江戸時代の染付磁器などの他、「本家吉井」銘の台付火打金が出土した。遺構性格は形状や箍の残存などから肥溜めと推定した。

4区（図9・23、図版3）

公園整備に伴う防火水槽建設予定地で、調査対象地の北西端部に位置する調査区である。当地点は西京極大路と春日小路の交差部南東隅に推定される。調査区規模は、東西8.0m、南北8.0m、面積64.0㎡である。現地表の標高は39.6～39.7mを測る。堆積状況は、表土下に層厚0.7～1.1mの盛土が認められるが、攪乱が少なく、標高39.0m以下に近代・近世以前の堆積層が確認される。遺構面（地山面）は現地表下1.7m（標高37.9m）に位置した。

遺構は、路面1条（路面137-1） 溝3条（溝131～133） 土塋（土塋136）などを検出した。

路面137-1は、調査区北端際で検出した。遺構本体は調査区外に位置する。検出部分は他の遺構に切られて規模が小さいが、道路敷特有の固く締められた礫敷面を検出した。検出長5.0m、標高37.4～37.7mを測る。堆積土は明緑灰色礫混泥砂（10GY8/1）である。遺物は未確認であるが、位置関係から春日小路関連の路面敷と推定される。

溝131は、調査区北端部の路面137の南側に位置する東西方向の溝で、西端部が南にやや屈曲する状態で検出した。遺構規模は検出長5.5m、幅1.5～2.6m、深さ0.3～0.5m、底面標高37.2～37.5mを測る。堆積土は青灰色～灰色シルト混砂礫（5BG5/1～5Y5/1） 暗灰黄色～灰色礫混砂（2.5Y4/2～5Y5/1）などである。遺物は鎌倉時代前期の土師器皿の他、平安時代前期の輸入陶磁器などが少量出土した。溝131は遺構時期や位置関係から春日小路の南側溝と推定され、西端のやや南に屈曲する状態は西京極大路交差部の南東隅に取り付く状態であると考えられる。

溝132は、調査区南辺部に位置する東西方向の溝で、北肩部のみを検出した。溝底部および南肩部は調査区外になる。溝132の検出位置は右京文化会館の試掘調査（1996）に於て春日小路南築地推定線の南側で検出した東西方向の溝（1・13区、溝2）の延長線上とみられ、幅5.0m以上、深さ1.7m以上の規模で濠状を呈する大規模な溝と推測される。溝132は、溝131と同様、西端部が南に屈曲する状態が認められ、西京極大路東側を南下する可能性がある。堆積土は黄灰色～にぶい黄橙色礫混粘質シルト（2.5Y4/1～10YR7/4） 黒褐色～黒色砂泥（10YR2/2～2.5Y2/1）などである。遺物は室町時代の土師器皿などが少量出土した。

溝133は、調査区西辺部に位置する南北方向の溝で、東肩部の一部を検出した。調査区西壁面に即して土留め板を伴う杭列を検出した。杭列は径9.0cmの丸太杭が0.6～0.8m間隔で打ち込まれており、土留め板は杭列の西側に設置されている。堆積土は黒褐色砂泥（10YR3/2） 褐灰色砂泥（10YR4/1） 暗灰黄色砂泥（2.5Y4/2）などである。遺物は近代以降のものが出土した。溝133は時代的には新しいが、位置的には西京極大路の東側溝に推測され、同側溝の位置が近代に至るまで踏襲されていた可能性もある。

土塋136は、調査区北側中央に位置する不定形な遺構である。規模は東西3.0m、南北2.9m以上、深さ0.9mを測る。堆積土は黒褐色泥砂（10YR2/3）などである。遺物は鎌倉時代の輸入陶器天

目椀が出土した。遺構性格としては、基盤層（2）が小礫を含むものの粒子の緻密な上質の粘土層であり、この土の採取を目的とした土取穴の可能性もある。また不規則に穿たれた小穴部分には若干有機質でさらに緻密な粒子をもつ褐灰色粘土（10YR5/1～4/1）の堆積が認められ、この点についても土取痕跡の可能性をよく示している。

4区の埋め戻し時には、路面137-1の北側部分を確認する目的で、北側中央を東西3.0m、南北1.5m、面積4.5㎡の規模で拡張した。その結果、表土下1.7～2.1m（標高37.5～37.9m）の間に路面137-1と同様の固く締められた数枚の礫敷面を検出した。礫敷面は最上面（路面137-2）と最下面（路面137-3）が堅固で明瞭な礫敷面であり、全体では層厚0.4mを測る。礫敷面からの遺物は未確認であるが、路面137-3の直上層からは鎌倉時代前期の土師器が少量出土したので、礫敷面の最下面はこの時期まで機能していた可能性がある。最上面の下限時期については直上層の堆積状況などから中世を降らないと判断される。

溝131と路面137-1～3の関係については、層的に路面137-1が鎌倉時代前期の溝131の下層に位置すること、路面137-3の直上層から鎌倉時代前期の遺物が出土すること、路面137-1と路面137-3が地山直上の路面で、上面の高さがほぼ一致しており、両者が対応すると判断されることなどから、古い順に示すと鎌倉時代前期以前の路面137-1と路面137-3が最も古く、次に鎌倉時代前期に埋まる溝131、そして上面が最も高く、中世を通じて存続した路面137-2となる。

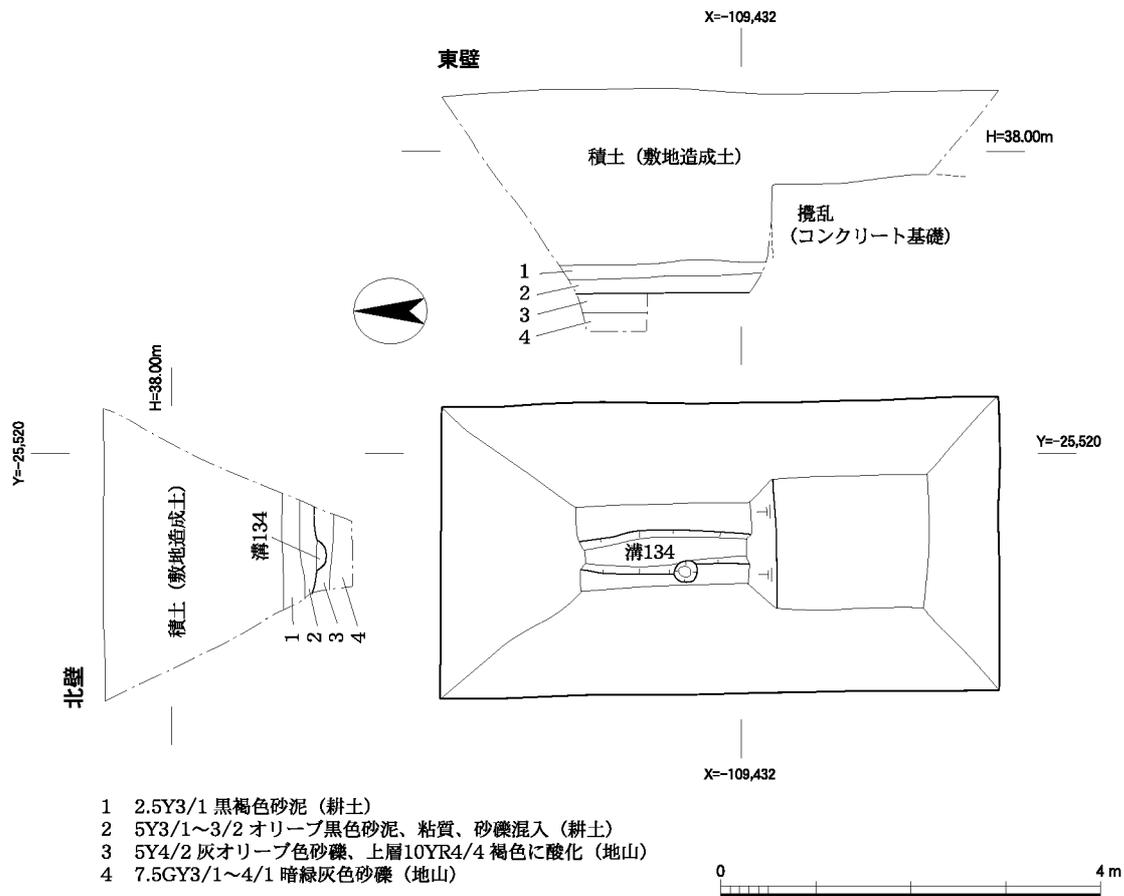


図10 5区遺構実測図（1：80）

土壌136については北肩部を路面137-3の南側に検出し、その南北規模が4.5mになることを確認した。また土壌136の上層では溝133と同様の杭列を東西方向に検出した。このことから溝133も当地点で東に屈曲している可能性が考えられる。

5区(図10、図版3)

公園整備に伴う便所棟建設予定地で、調査対象地の西端部に位置する調査区である。当地点の西約50mの地点に先述した「安井西裏瓦窯」が位置する。調査区規模は、東西3.1m、南北5.8m、面積18.0㎡である。現地表の標高は38.6～38.7mを測る。堆積状況は南半部に建物基礎があり、北半部では現地表下1.8～1.9m(標高36.8～36.9m)まで盛土がみられ、以下に近世以前の堆積層が認められる。遺構面(地山面)は現地表下2.1～2.2m(標高36.5m)に位置した。

遺構は、溝1条(溝134)とピットを検出した。

溝134は、調査区中央に位置する南北方向の溝で、検出長1.8m、幅0.3～0.5m、深さ0.1～0.2mを測る。堆積土はオリーブ黒砂泥(5Y3/1)である。遺物は中世の土師器皿が少量出土した。

4. 遺物

平安時代から江戸時代までの遺物が整理箱にして12箱分出土した。

平安時代の遺物は、土師器(皿、高杯、甕)、須恵器(甕)、緑釉陶器(皿)、灰釉陶器(皿)、輸入陶磁器(白磁椀、青磁椀・壺)、瓦(軒平瓦、丸瓦、平瓦)などである。

鎌倉・室町時代の遺物は、土師器(皿、高杯)、須恵器(鉢、甕)、瓦器(椀、鍋、羽釜、火舎)、焼締陶器(擂鉢、甕)、施釉陶器(鉢)、輸入陶磁器(天目椀、青磁椀、染付皿)、土製品(小壺)、瓦(軒丸瓦、丸瓦、平瓦)、埴(敷埴)、銭貨、金属製品(小壺)、木製品(球状木製品)、石製品(滑石製羽釜)などである。

桃山・江戸時代の遺物は、土師器(皿、鍋、壺)、焼締陶器(擂鉢、甕)、国産陶磁器(椀、皿、

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦		土師器22点、緑釉陶器4点、灰釉陶器1点、輸入陶磁器1点、瓦2点		
鎌倉・室町時代	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、土製品、瓦、埴、銭貨、金属製品、木製品、石製品		土師器37点、瓦器1点、輸入陶磁器3点、土製品1点、瓦1点、銭貨2点、金属製品1点、木製品1点		
桃山・江戸時代	土師器、焼締陶器、国産陶磁器、木製品		木製品1点		
合計		14箱	78点(2箱)	11箱	1箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

鉢)、木製品(火打金付板)などである。以下、図示した遺物を中心にして報告する。

溝1出土遺物(図11・19、図版5)

西京極大路西側溝と推定した溝1(1-1区)では、土師器(皿)、須恵器(鉢)、瓦器(鉢)、緑釉陶器、焼締陶器(甕)、軒平瓦、丸瓦、平瓦、板状鉄製品、鉄滓などが出土した。遺物は小片が多く、土師器皿が大半を占める。緑釉陶器は古い時期の混入品である。板状鉄製品は錆の付着が著しく原形については不明瞭である。調査では上層から下層にかけて3~4層に区別して遺物を取りあげたが、堆積土にはレンズ状に堆積した部分もみられた(図5-北壁断面図)。

土師器皿1~37(図11)は、1~9が上層、10~21が中層、22~37が下層から出土したもので、各層ごと小口径のものから順に配した。この土器群の特徴としては、全体に土師器皿Nの小口径から大口径のものであるが、型式差をもつものが混在してみられることである。年代については、京都中心部出土の土師器編年案の⁴⁾期新から期新にかけた時期に比定され、12世紀後半から13世紀中頃までの時期幅を有する土器群として位置付けられる。ただし、出土量の比率としては下層では古相のもの、上層では新相のものがそれぞれ中心的な傾向を示していることから、12世紀後半代に機能していた溝が一時期拡幅して改修された後、13世紀中頃には埋没したものと推定している。

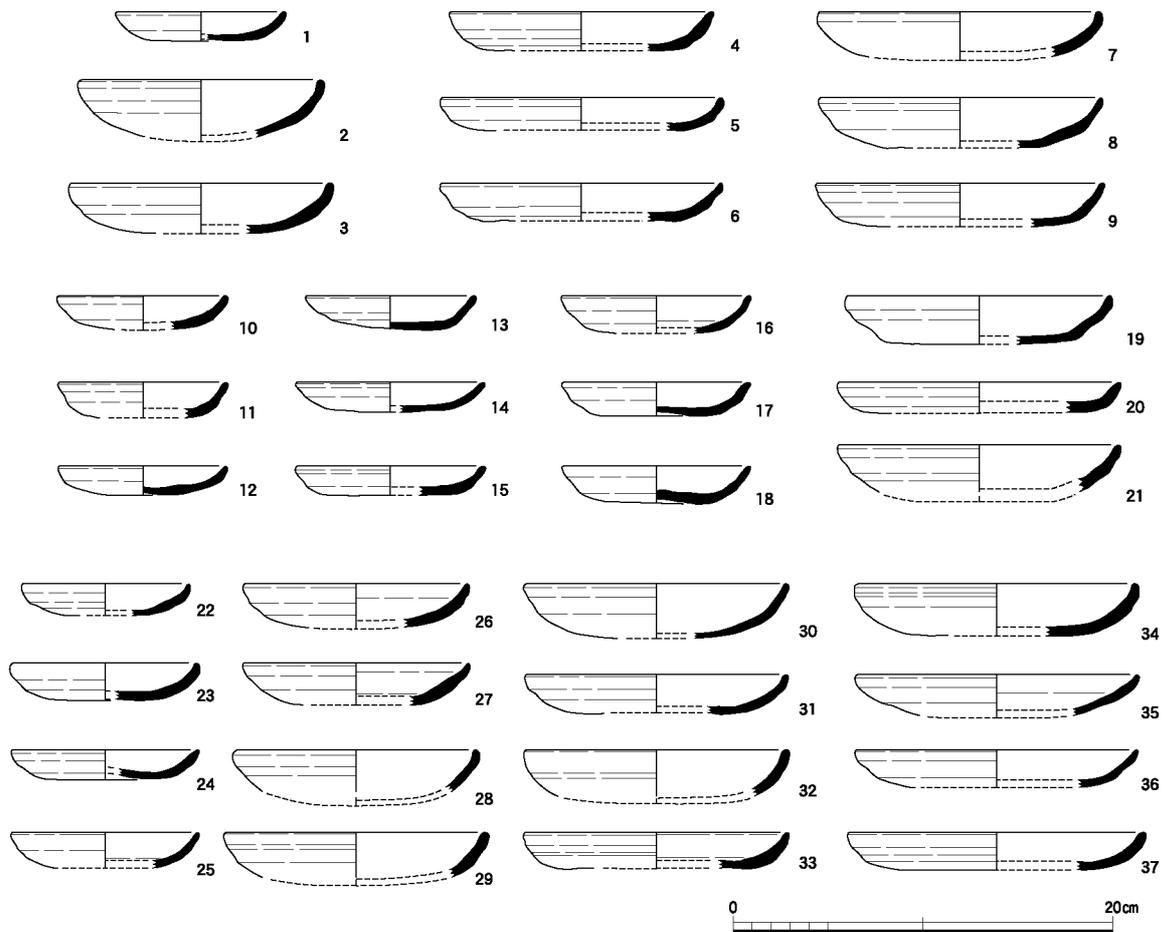


図11 溝1出土土器実測図(1:4)

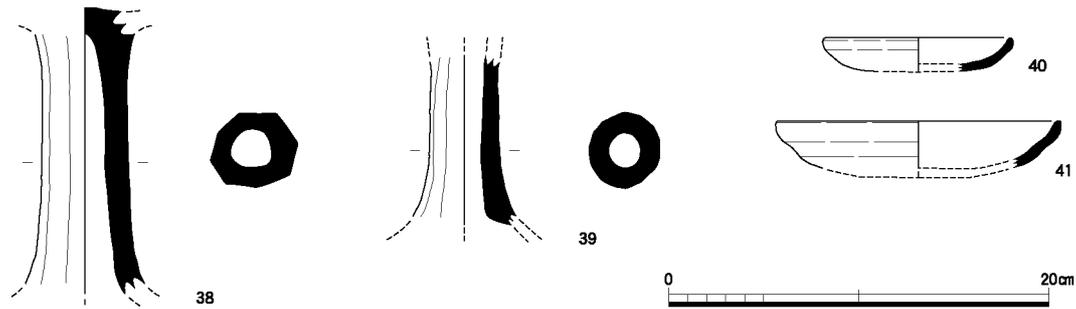


図12 溝81・82出土土器実測図（1：4）

軒平瓦72（図19）は小片であるが、瓦当に唐草文の一部が遺存する平安時代後期の瓦である。上層から出土した。

溝81出土遺物（図12・13、図版5）

西京極大路東側溝と推定した溝81（2区）では、土師器（皿、高杯）、須恵器（鉢、甕）、緑釉陶器（皿）、平瓦などが出土した。

土師器皿はほとんどが小片で図化し得なかったが、土師器編年案の 期新から 期新にかけた時期に比定される12世紀後半から13世紀中頃までのものが少量出土した。土師器高杯38・39（図12）は、38が 期（9世紀中頃から10世紀前半）、39が 期（12世紀代）に比定される。38は下層、39は上層から出土した。

緑釉陶器皿42・43（図13）は、陰刻花文が内面に施されており、 期中（9世紀後半代）に比定される。線刻がやや稚拙であるが、高台の造形が貼付高台と認められることから愛知県猿投窯産と考えられる。いずれも下層から出土した。全体としては出土量が少ないにもかかわらず、古い時期の混入品が比較的多いことが注目される。

溝82出土遺物（図12）

溝82（2区）では、土師器（皿）、須恵器（甕）、瓦器（椀）、緑釉陶器（皿）、焼締陶器（甕）、輸入陶磁器（白磁椀）、平瓦などが出土した。図示した土師器皿40・41は土師器編年案の 期に比定され、12世紀代に属する土器と位置付けられる。溝82は推定西京極大路東側溝の溝81と切り合っており、溝81の東側で南に延長する溝であり、側溝と関連する可能性をもつ溝である。

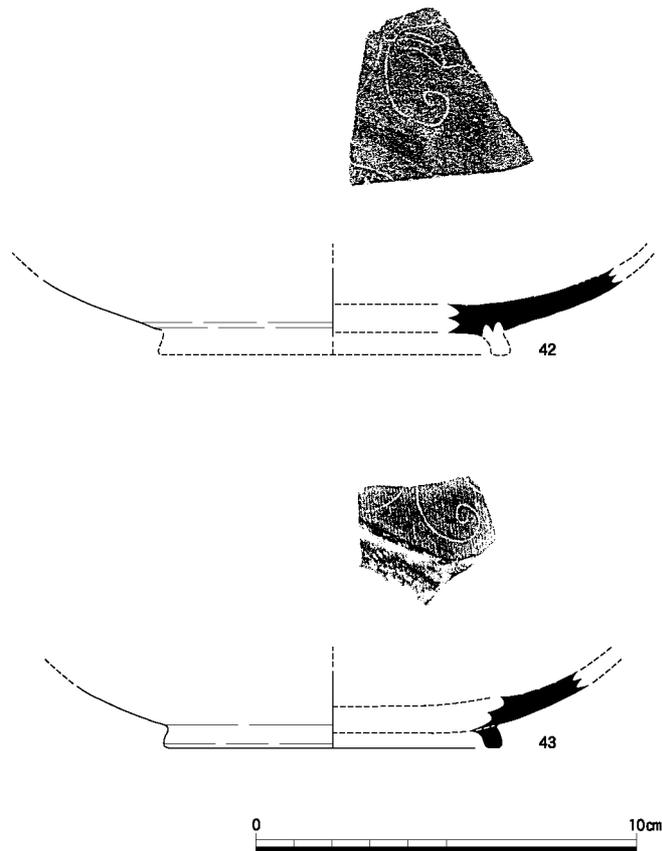


図13 溝81下層出土土器拓影・実測図（1：2）

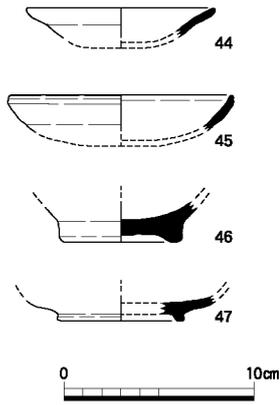


図14 溝131・路面137出土土器
実測図(1:4)

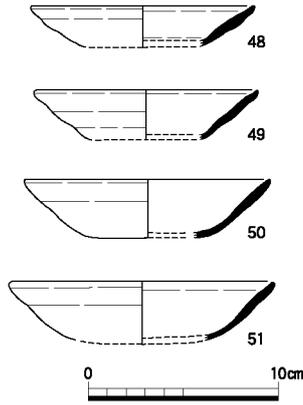


図15 溝83出土土器実測図
(1:4)

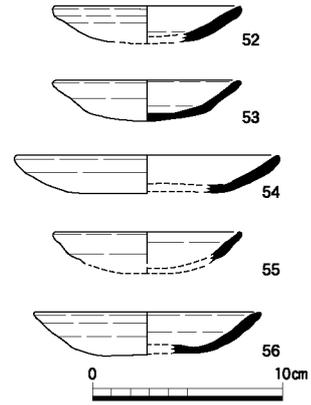


図16 溝132出土土器実測図
(1:4)

溝131・路面137出土遺物(図14、図版5)

春日小路南側溝と推定した溝131(4区)では、土師器(皿)、輸入陶磁器(青磁壺、白磁椀)などが出土した。図示した土師器皿44は土師器編年案の 期新から 期古(15世紀末から16世紀前半)、土師器皿45は 期中から 期古(13世紀代)に比定される。44は上層、45は下層から出土した。白磁椀46は玉縁形口縁をもつ椀の高台部で、12世紀代に位置付けられる。上層から出土した。青磁壺は小片でやや表面が磨滅しているが、釉調や胎土から越州窯のものと判断され、9世紀後半代に位置付けられる。下層から出土した。

春日小路路面と推定した路面137-3の直上では、鎌倉時代前期の土師器皿の他、灰釉陶器皿47が出土した。47は9世紀中頃から後半代に位置付けられる土器で、体部の立ち上がりやや湾曲することから耳皿の可能性もある。

溝83出土遺物(図15)

溝83(2区)では、土師器(皿)、瓦器(羽釜)などが出土した。図示した土師器皿48~51は土師器編年案の 期新に比定され、15世紀前半代に属する土器と位置付けられる。溝83は時期的にみて条坊の区画溝とは考えられないが、溝82のさらに東側に位置する南北方向の溝であり、側溝と関連する可能性もある。

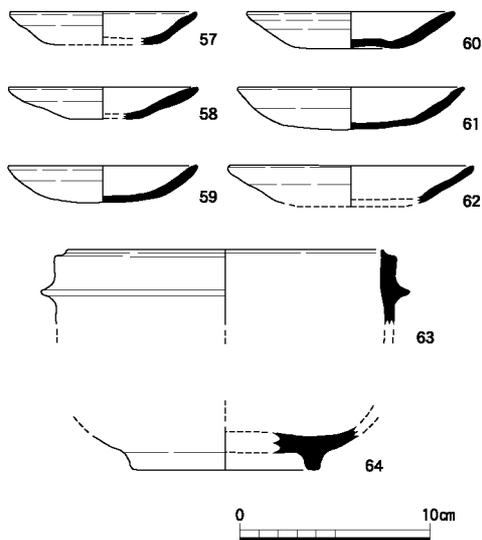


図17 土壙80上層出土土器実測図(1:4)

溝132出土遺物(図16)

溝132(4区)では、肩部斜面までの検出に限られたが、土師器(皿)、焼締陶器(播鉢)、施釉陶器、磁器などが出土した。図示した土師器皿52~56は土師器編年案の 期新に比定され、16世紀後半代に属する土器と位置付けられる。52~54は斜面中層、55・56は斜面下層から出土した。

土壙80出土遺物(図17~20、図版5)

土壙80(2区)では、土師器(皿、鍋)、須恵器

(捏鉢、甕)、緑釉陶器(皿)、灰釉陶器(壺)、瓦器(羽釜)、輸入陶磁器(青磁椀・鉢、染付皿)、施釉陶器、焼締陶器(播鉢、甕)、土製品(小壺)、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、敷摺、銭貨、金属製品、木製品などが出土した。緑釉陶器と灰釉陶器は古い時期からの混入品である。

上層から出土した土器を図17に示した。土師器皿57～62は土師器編年案の期新に比定され、16世紀後半代に属する土器と位置付けられる。63は瓦器羽釜、64は輸入陶磁器青磁椀である。

下層から出土した土器を図18に示した。土師器皿66は期古～中に比定され、16世紀前半代に属する土器と位置付けられる。65は土製品小壺であるが、焼成がやや不良であり、瓦器の可能性もある。67・68は10世紀代に属するとみられる緑釉陶器皿である。図版5に掲載した輸入陶磁器の青磁椀69は鎬のない簡略化された蓮弁文を外面に施す。染付皿70は高台をもつ小口径のもので、明代に属するとみられる。

瓦類は下層から軒丸瓦71(図19)が出土した。71は連珠巴文の瓦当をもつ室町時代に属する瓦である。図示できなかったが、丸瓦および平瓦は厚味をもつものが多くみられ、また寺院などの床に敷き詰められる敷摺も厚さ3.6～4.2cmを測る厚味のものが多量に出土した。

銭貨(図20)は、嘉祐通寶74、治元聖寶75が上層から出土した。嘉祐通寶は嘉祐年間(1056～1063)に鑄造された北宋銭、治元聖寶は安南銭である。

金属製品(図版5)は、銅製小壺76が下層から出土した。口径1.1cm、肩径4.1cm、底径3.7cmを測る。筆記具の一つである水滴の可能性はある。

木製品(図版5)は、球状木製品77が下層から出土した。胴径4.8cm、高さ3.9cmを測る。毬杖ぎつちように用いられるまり毬の可能性はある。毬杖とは木製の

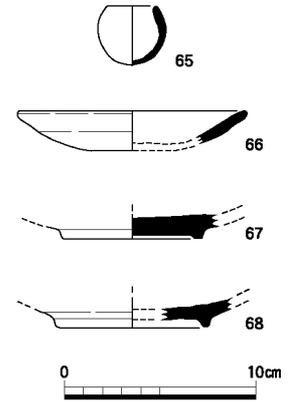


図18 土壇80下層出土土器実測図(1:4)

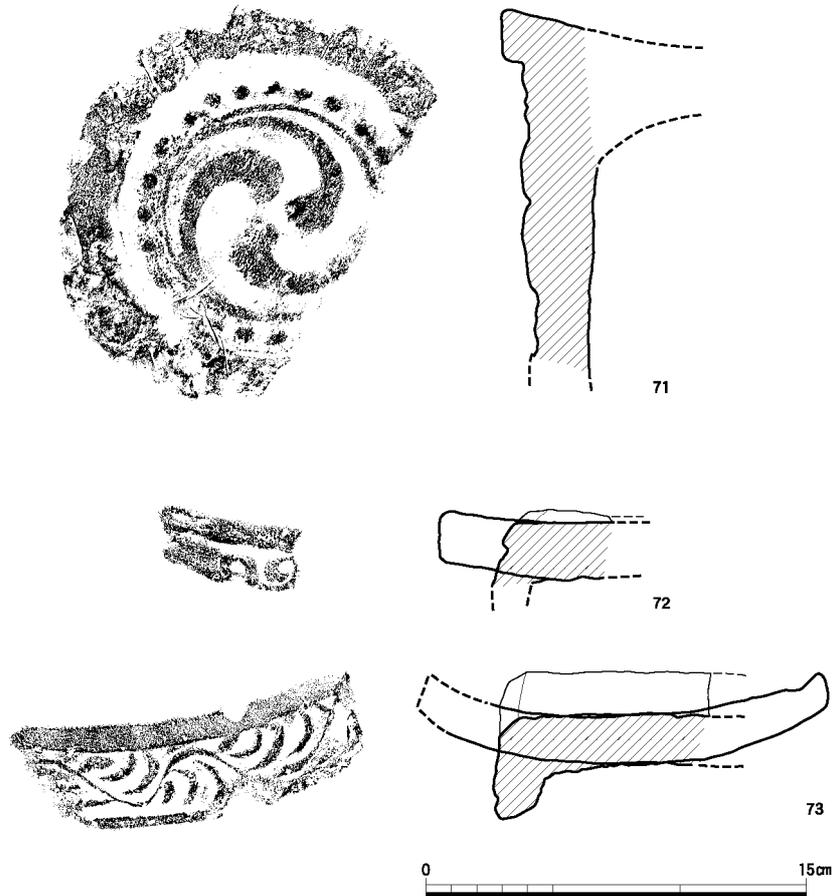


図19 軒瓦拓影・実測図(1:3)

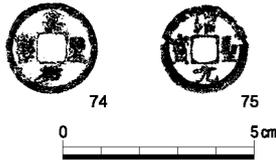


図20 土壌80上層出土銭貨拓影(1:2)

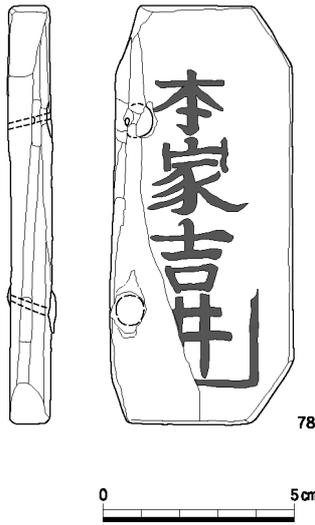


図21 土壌111出土木製品実測図(1:2)

毬を打つ長柄の槌のことで、現在のゲートボールに類似した遊戯具である。

土壌105出土遺物(図19、図版5)

土壌105(1-2区)では、土師器(皿)、須恵器(甕)、緑釉陶器(皿)、瓦器(火舎)、焼締陶器(鉢、搦鉢)、軒平瓦、丸瓦、平瓦などが出土した。緑釉陶器、軒平瓦は古い時期からの混入品である。土師器皿は少量が出土しており、16世紀後半代に属する土器と推定している。遺構規模の大きさや出土遺物の様相および時期など、土壌80(2区)と類似する。ここでは、混入品ながら周辺の残存遺構との関連性を示すものとして軒平瓦73を図19に示した。73は唐草文の瓦当をもつ平安時代後期の瓦である。

土壌111出土遺物(図21、図版5)

土壌111(3区)では、台付火打金の付板78が籬内の堆積土から出土した。付板は長さ11.0cm、幅4.8cm、厚さ1.1cmを測り、片側2方の角隅を切り落としている。台付火打金は発火具の一つで、鋸形の鑿を板の側面に打ち付けたものである。本資料では付板と留め金具が遺存し、板片面には「本家吉井」銘が焼印で記されている。火打金は、江戸時代に群馬県南西部の多野郡吉井町で盛んに生産され、台付の「台燧」および鑿だけの「三角燧」「鎌燧」などが販売され

た。台付火打金は18世紀後半以降に生産されたものとみられ、付板の焼印には「吉井」「吉井本家」「上州吉井」「吉井本家請合」などの銘がみられる。⁵⁾ただし、この類似した銘から本資料が群馬県吉井町で生産されたものかどうかについては今後の研究課題としておきたい。

5.まとめ

本調査で主な目的とした西京極大路の確認については、検出規模が狭小であり、残存状況も良好とはいえなかったが、相応の成果は得られたものと考えている。また春日小路についても新たな知見を得られたことは予想外の成果である(図22・23)。

西京極大路については、先述した花園駅の調査(1990・1996)、右京文化会館の調査(1997)があり、前者では路面および東西両側溝、後者では路面および西側溝を検出している。本調査では路面が未検出であるが、東西両側溝の遺構・遺物を検出することができた。

西側溝については、待賢門院の御願により大治5年(1130)に建立された法金剛院境内の整備に伴い道路幅が縮小され、寺域外の南方に位置する当該地にも及んでいたことが明らかにされている。本調査で検出した溝1(1-1区)についても西側溝推定線より東側に位置しており、遺構の時期および検出状況から西京極大路西側溝と判断した。溝1北端中心の座標はX=-109,420.93

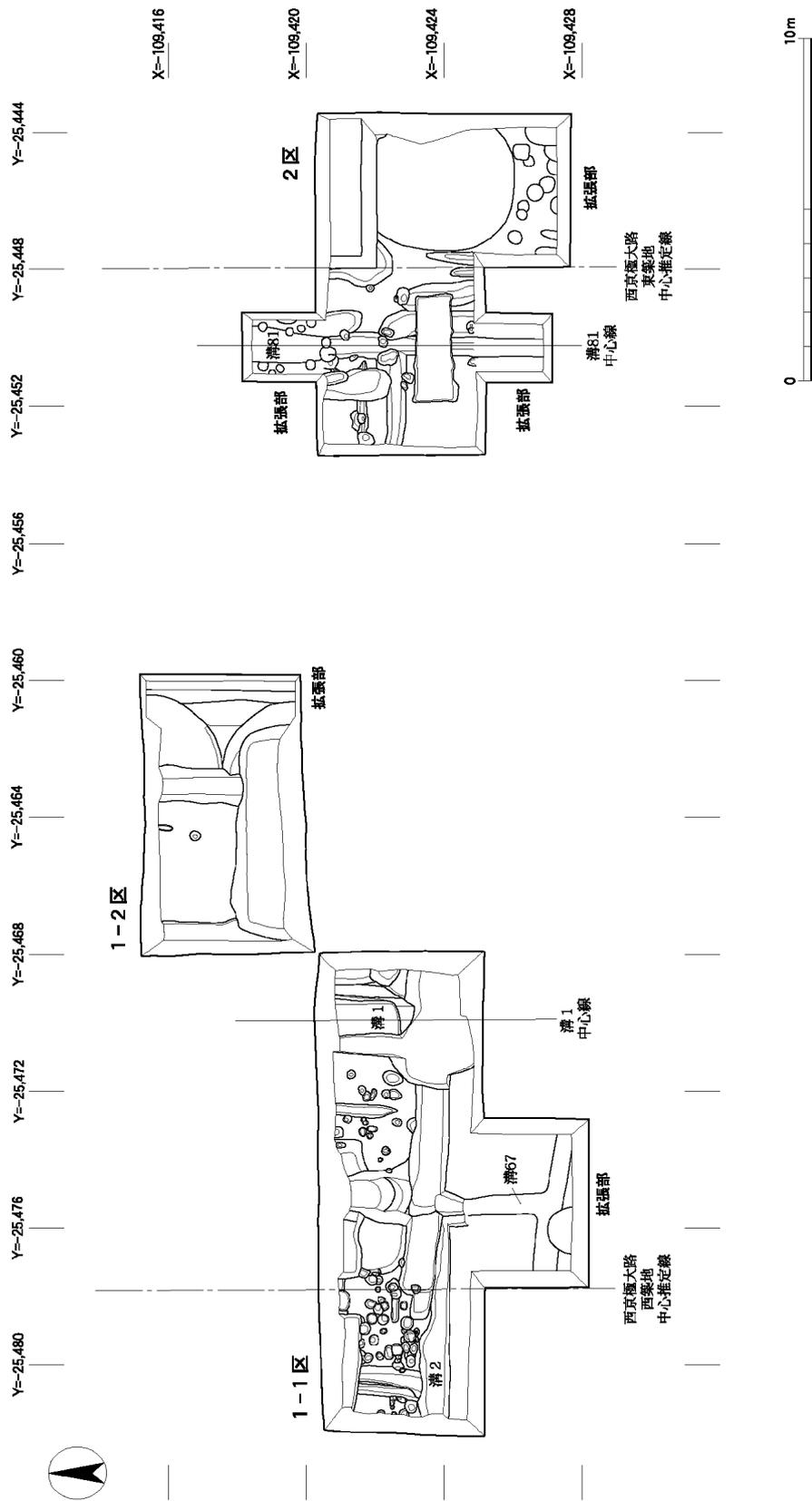


図22 1・2区条坊関連遺構図(1:200)

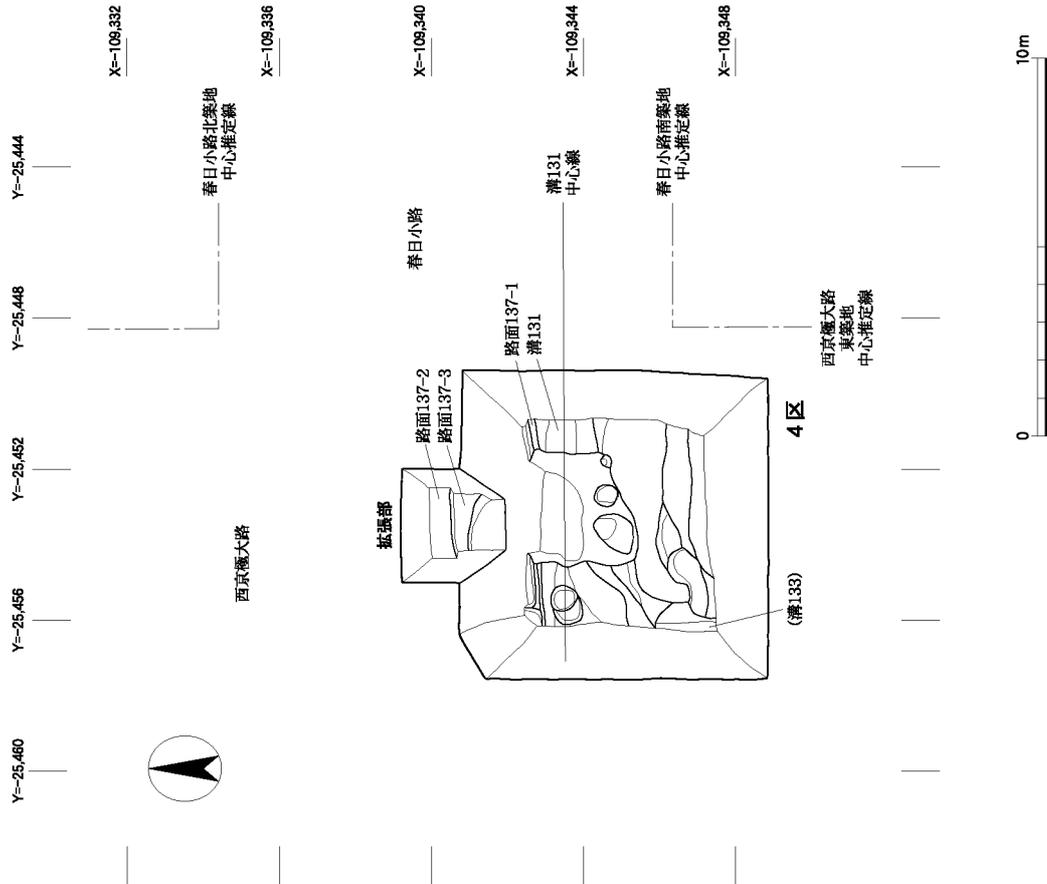


図23 4区条坊関連遺構図(1:200)

m、Y=-25,469.90m、底面標高は37.65mを測る。西側溝中心推定線のY軸座標は-25,474.81mであり、溝1の位置は推定よりも東に4.91m(約5.0m)ずれていることになる。

東側溝については、遺構規模が若干小さいが、遺構時期および検出位置から溝81(2区)が西京極大路東側溝であると推定され、十五町の西限を画する溝と判断される。東側溝の調査事例としては2例目となる。溝81北端中心の座標はX=-109,420.60m、Y=-25,450.25m、底面標高は38.27mを測る。東側溝中心推定線のY軸座標は-25,450.95mであり、溝81の位置は推定よりも東に0.70mずれていることになる。

この様に、東西両側溝と推定した溝1・81の中心座標からは溝心々間19.65mという数値が得られ、これに基づくと当地点での西京極大路の道路幅は東西両築地が存在したと仮定した場合、25.62m(約8.6丈)と推定される。

『延喜式』京程記載の道路幅30m(10丈)に関する遺構については、西築地推定線の西側で検出した溝2(1-1区)が鎌倉時代の遺構であり、平安時代に遡る溝が未検出であることから、当地点では後世の削平を受けたか、あるいは後世まで遺存する安定した規模の側溝が開削されなかった可能性が高いといえる。

春日小路については、4区の西京極大路との交差点部南東隅の推定位置に於て屈曲して南下し始める状態の南側溝(溝131)および路面(路面137)を検出した。他の遺構に削剥されて遺存状

態が良好とはいえないが、遺構時期および検出位置から溝131が春日小路南側溝であると判断した。ただし、春日小路に関する調査事例では推定位置から3.0m前後のずれが認められるので、遺構の存続時期を含め、さらに検討が必要である。溝131東端中心の座標はX=-109,343.43m、Y=-25,450.70m、底面標高は37.58mを測る。南側溝中心推定線のX軸座標は-109,344.27mであり、溝131の位置は推定よりも北に0.84mずれていることになる。

鎌倉・室町時代の溝、土壇、掘込、柱穴、ピットなどの遺構群は、調査地北半部の遺構については弘安5年(1282)に律宗円覚上人導御によって復興された法金剛院との関連が推測される。調査地南半部の遺構については、室町時代に広大な寺域を誇った龍翔寺と関連する可能性が高いといえる。

江戸時代以降の特徴的な遺構である土壇111については、籓内下層の堆積土を分析したところ、回虫や吸虫などの寄生虫卵が立法cm内に1,000個以上含まれているという結果が得られた。近年、特に進展してきた考古学に於けるトイレ研究の成果と照合しても、当該遺構が糞尿をためておいた肥溜めであったことは、ほぼ間違いないと判断される。

出土遺物については、平安時代の各時期を通じた混入品が多くみられた。これらは十五町に推定されている右近衛府の所領に於て用いられた可能性があり、また鎌倉・室町時代の輸入陶磁器の出土についても法金剛院あるいは龍翔寺との関連が注目されよう。

註

- 1) 平田 泰「平安京右京一条四坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 2) 小松武彦・吉村正親・小檜山一良「平安京右京一条四坊・法金剛院境内」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- 3) 田中利津子・辻 裕司・大立目 一「平安京右京二条四坊・安井西裏瓦窯跡」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 4) 小森俊寛・上村憲章「京都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要 第3号』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 5) 大西雅広「上州吉井の火打金と火打石」『江戸遺跡研究会会報 No.77』江戸遺跡研究会 2000年

付表1 溝1出土掲載土器一覽表

No.	種類・器形	口径	器高	備考
1	土師器 皿	8.7	(1.5)	
2	土師器 皿	12.6	(3.0)	
3	土師器 皿	13.5	(2.7)	
4	土師器 皿	13.8	(2.1)	
5	土師器 皿	14.7	(1.8)	
6	土師器 皿	14.8	(2.0)	
7	土師器 皿	14.8	(2.4)	
8	土師器 皿	14.8	(2.7)	
9	土師器 皿	15.0	(2.3)	
10	土師器 皿	8.6	(1.8)	
11	土師器 皿	8.8	(1.9)	
12	土師器 皿	8.8	1.5	
13	土師器 皿	8.8	1.8	
14	土師器 皿	9.8	1.6	
15	土師器 皿	9.8	1.6	
16	土師器 皿	9.8	(2.0)	
17	土師器 皿	9.8	1.8	
18	土師器 皿	9.8	2.0	
19	土師器 皿	13.8	(2.6)	
20	土師器 皿	14.8	(1.6)	
21	土師器 皿	14.8	(2.5)	
22	土師器 皿	8.7	(1.7)	
23	土師器 皿	9.6	2.0	
24	土師器 皿	9.8	1.6	
25	土師器 皿	9.8	1.9	
26	土師器 皿	11.8	(2.3)	
27	土師器 皿	11.8	(2.2)	
28	土師器 皿	12.5	(2.2)	
29	土師器 皿	13.6	(2.4)	
30	土師器 皿	13.7	(2.9)	
31	土師器 皿	13.8	(2.1)	
32	土師器 皿	13.8	(2.5)	
33	土師器 皿	13.8	(1.9)	
34	土師器 皿	14.5	(2.8)	
35	土師器 皿	14.7	(2.2)	
36	土師器 皿	14.8	(2.0)	
37	土師器 皿	15.6	(2.0)	

付表2 溝81・82出土掲載土器一覽表

No.	種類・器形	口径	器高	備考
38	土師器 高杯(脚)	—	(15.2)	溝81
39	土師器 高杯(脚)	—	(8.9)	溝81
40	土師器 皿	9.7	(1.8)	溝82
41	土師器 皿	14.8	(2.5)	溝82

付表3 溝81下層出土掲載土器一覽表

No.	種類・器形	口径	器高	備考
42	緑釉陶器 皿	—	(1.8)	
43	緑釉陶器 皿	底径 8.8	(2.0)	

付表4 溝131・路面137出土掲載土器一覽表

No.	種類・器形	口径	器高	備考
44	土師器 皿	9.8	(1.6)	溝131
45	土師器 皿	11.6	(1.9)	溝131
46	輸入陶磁器 白磁 椀	底径 6.0	(2.1)	溝131
47	灰釉陶器 皿	底径 6.6	(1.3)	路面137

付表5 溝83出土掲載土器一覽表

No.	種類・器形	口径	器高	備考
48	土師器 皿	11.8	(2.2)	
49	土師器 皿	11.8	(2.6)	
50	土師器 皿	12.8	(3.1)	
51	土師器 皿	13.8	(3.1)	

付表6 溝132出土掲載土器一覽表

No.	種類・器形	口径	器高	備考
52	土師器 皿	9.7	(1.9)	
53	土師器 皿	9.6	2.2	
54	土師器 皿	13.8	(2.0)	
55	土師器 皿	9.7	(1.7)	
56	土師器 皿	11.8	(2.2)	

付表7 土壙80上層出土掲載土器一覽表

No.	種類・器形	口径	器高	備考
57	土師器 皿	9.7	(1.8)	
58	土師器 皿	9.8	(2.2)	
59	土師器 皿	9.8	2.0	
60	土師器 皿	10.8	2.0	
61	土師器 皿	11.8	2.3	
62	土師器 皿	12.9	(2.0)	
63	瓦器 羽釜	16.4	(4.0)	
64	輸入陶磁器 青磁 椀	底径 9.7	(2.3)	

付表8 土壙80下層出土掲載土器一覽表

No.	種類・器形	口径	器高	備考
65	土製品 小壺	2.6	3.2	胴径3.6
66	土師器 皿	11.8	(1.7)	
67	緑釉陶器 皿	底径 7.3	(1.3)	
68	緑釉陶器 皿	底径 8.0	(1.5)	
69	輸入陶磁器 青磁 椀	10.2	(4.8)	
70	輸入陶磁器 染付 皿	10.0	2.4	

付表9 掲載軒瓦一覽表

No.	種類	備考
71	軒丸瓦	土壙80下層
72	軒平瓦	溝1上層
73	軒平瓦	土壙105

※ 単位：cm
()：残存高

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううぎょうにじょうしぼうじゅうごちょうあと							
書名	平安京右京二条四坊十五町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2005-13							
編著者名	長戸満男							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2006年3月17日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううぎょう 平安京右京 にじょうしぼう 二条四坊 じゅうごちょうあと 十五町跡	きょうとしうぎょうく 京都市右京区 うずまさやすいにしうら 太秦安井西裏 ちょう ちない 町 地内	26100		35度 00分 48秒	135度 43分 15秒	2005年10月 11日～2006 年2月16日	298m ²	公園整備 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京右京 二条四坊 十五町跡	都城跡	平安時代後期	溝	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦		平安京西京極大路の東西側溝を検出した。		
		鎌倉・室町時代	路面、溝、土壇、柱穴、ピット	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、土製品、瓦、埴、銭貨、金属製品、木製品、石製品		平安京春日小路の路面および南側溝を検出した。		
		江戸時代	溝、土壇、柱穴、ピット	土師器、焼締陶器、国産陶磁器、木製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-13

平安京右京二条四坊十五町跡

発行日 2006年3月17日

編集行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961